地域づくり通信　NO.23

ふくおかの元気印

2008年3月刊　発行：地域づくりネットワーク福岡県協議会

報告

第6回福岡県地域おこし研修・交流会（前原市）

第25回地域づくり団体全国研修交流会（茨城）

福岡県の「げん木」　シリーズ⑤

虎尾桜

筑豊の名山、福智山で平成元年に見つかった山桜。エドヒガンで樹齢600年以上。地元の人が「虎尾桜」と名付け、毎春、観覧会（4月）を開く。みごとな濃いピンクの花が空をうめる。

第6回福岡県地域おこし研修交流会

ネットワークで ―― 地域を元気にする

テーマ「ネットワーク　“みず”と“みどり”と“まち”」

第6回「福岡県地域おこし研修・交流会」は2月16日、前原市の伊都文化会館で開催され、県内各地から地域づくり活動の代表者を始め、行政関係者など約80人が参加して、活発な情報交換や意見・討議が行われた。

特に今回は九州大学(福岡市)の伊都キャンパス(前原市など)への移転に伴ない、既に多くの学生たちが移住しており、彼ら若い世代の皆さんが地域にとけ込み、新しい地域づくりの活動を始めていることに会場から賛嘆の声が上がっていた。

今年度の研修・交流会は「ネットワーク　”みず“と”みどり“と”まち“」を全体テーマに2月16日（土）午後1時から開会。研修会は午後5時まで4時間にわたって熱心な討議を重ねたあと、交流会も用意され、会員同士の率直な意見交換や親交が行われ、大いに盛り上った。

まず、開会挨拶として主催者側の「地域づくりネットワーク福岡県協議会」の辛島秀典副会長（福岡県地域政策課長）が地域づくりにおける人と人とのつながり＝ネットワークの重要さを訴え、「研修が実りあるものになるよう期待している」と語った。

次いで開催ブロック代表のNPO法人「はかた夢松原の会」の川口道子理事長が挨拶。生活者の視点から・環境問題への取組みの大切さを指摘した。

地元、前原市の松本嶺男市長は歓迎の挨拶に立ち、九州大学の移転に伴う官と学の将来構想について熱く語った。

既に、九大との間に50もの「地域づくり」に関する連携事業を実施しているという。

会場を埋めた参加者の皆さん。熱心な討論はもちろんだが、年1回の大会なので会員同士の熱い交流が会場のあちこちで見られた。

問題提起

ネットワークの現状と課題
～みず・みどり・まちの これまでに関わって～

九州大学大学院工学研究院
島谷幸宏教授

最初に九州大学の島谷教授から、ネットワークの現状と課題として問題提起が行われた。（以下概要）

最近、環境問題が盛んに言われるようになりましたが、山～川～まち～海という考え方は果たして新しい考え方なのでしょうか？

「海の民は山が必要であった」――という言葉があります。福岡は古代から大陸との関係が深く、河川の流域で国を造り、船を造った。つまり山の木を必要としたのです。

有明海の方面でも、それは言えます。家具の生産で知られる大川市。そこは山の木を使った船大工の腕が今日に活かされているのです。

福岡県内でも他に例をあげれば沢山あります。行橋の今井祇園祭りも一例です。山車（やま）の車輪を海岸に埋め、それを祭りの毎に地元の人が力をあわせて掘り出し、お祭りに持っていく。これは何なのか？

私たちが「まちづくり」を考える際、私は「祭り」のかたちが大変参考になると思います。つまり、祭りは1人では出来ない、皆で力をあわせて”掘り出す“必要がある、と思うのです。言ってみれば地域間のネットワークの必要性ですね。

私は九州大学を卒業して、今の国交省に務め、九州大学に戻ったのですが、その経験も含め、学生の皆さんに共に勧めていることがあります。それは日本古来の「打ち水（うみず）」の勧めです。九大、福大などの学生さんと2006年7月からボランティア活動でやっています。「打ち水」の基本は「水をまいて分かる水の循環」ということで、要するに①打ち水には水道水を使わない②雨水を貯めることが大切③アスファルト舗道はダメ―等々で、水の循環を考える”統合治水“の勉強を若い人にして欲しいからです。放置自転車が問題の福岡市の一角で、打ち水を使

問題提起で講演する島谷教授。国交省に務めた経験もあり豊富な映像と事例紹介に会場は感動。

って朝顔を植えたら、放置自転車がなくなりました(笑い)。そして行政当局や大学や企業とのコラボレーションも成立しました。どうやって環境問題のネットワークを築いていくのか—私は「思想性がない」ことが一つのヒントだと思います。

事例発表

学生と「まちづくり」
糸島地域における
九州大学の学生による
取組み報告

「地元の人との交流は楽しい」と九大の大学院生、久保山君と竹内さん。来年は約1万人の教職員、学生が伊都キャンパスへ移転するという。

島谷教授の講演のあと、同教授の授業を受けた2人の九大の学生による、地元の「まちづくり」参加の事例報告があった。2人は「伊都祭」実行委員長の久保山宏君(九大・大学院工学府博士課程2年)と竹内美都さん(同・修士課程1年)で「学生とまちづくり～糸島地域のまちづくりに対する九州大学の影響と大学生の可能性～」と題して、これまでに実施した様々な地域との係わりを報告した。

まず、大学での講義として「福岡打ち水大作戦ｉｎまえばる」の紹介があった。これは前記の島谷教授の指導によるもので昨年7月24日、九大生31人の参加と前原市や商工会の協力のもと、筑前前原駅前で実施された。この際、学生による「打ち水」だけではなく、地域の「山笠祭り」に男子学生が参加して、大いに地元の人との交流を深めた。

これらをきっかけに地元との交流の輪はさらに広がり、深まって行った。①学生団体による今津公民館での科学塾②環境への関心や意識を深めるためのオリジナルの「エコバック」の企画・販売③「伊都祭」の企画と実行——等々、多様な取組みが実現した。

特に③の「伊都祭」については昨年11月10日、九大・伊都キャンパスで食品、農産品、海産物の物販を用意したところ約3千人の来場者があり大盛況で完売した。実行委員長の久保山君は「私たち学生と地元の方との〝おつきあい〟の楽しさを学びました」と率直に語り、会場から大きな拍手。

3つの分科会で討議——福岡県内の様々な活動を報告

このあと3つの分科会の会場に別れて1時間30分のディスカッション。第1分科会では「〝みず〟と〝みどり〟のネットワーク」をテーマに福岡県内の2団体からの報告。まず「犬鳴川みどりの会」(宮若市)の笹栗一義会長。一昨年2月、旧宮田町と旧若宮町の合併で新市となったが、それ以前の平成6年、「犬鳴川の土手に桜並木をつくろう」と市民ボランティアで運動開始。今では見事な桜名所となり、地元に誘致したトヨタ自動車や東芝等10数社の社員・家族の憩いの場にもなっている。

続いてＮＰＯ法人「農と自然の研究所」代表理事、宇根豊氏。福岡県の元・農業改良普及員だった氏は、自ら有機農法の実践に取組み、現在、福岡県二丈町で農業を営む。「田んぼの生きものへのまなざしをみんなに」と題した話は会場に強い感銘を与えた。

第2分科会では「〝みどり〟と〝まち〟のネットワーク」がテーマ。まず「あんずの里市利用組合」の副組合長、花田鶴子さんが活動報告。以前の津屋崎町(現在の福津市)の農家の主婦たちが中心になって農産物の販売を平成8年から町の施設を利用して開始。朝市の先例となり北九州市、福岡市から毎日、多数が訪れる。2例目は福岡市の古い街、筥崎宮の近辺を拠点とする「筥崎まちづくり放談会」の副理事長、斉藤政雄氏の報告。町の区画整理に伴う活動を行政当局と粘り強く重ね、民営レストランや小劇場の開設など地域の人が集う場所づくりを果たした。

第3分科会はテーマ「〝まち〟と〝みず〟のネットワーク」。まず、「大木まちづくりセンター運営協議会」(大木町)の野田昌志氏が「大木堀なおし」と題して話した。大木町は堀の多い所。その堀が今、荒廃している。人と堀との新しい関係をめざして堀の再生に努める報告に会場から拍手が湧いた。次は「太宰府水から川る会」(太宰府市)の代表、大隈和子さん。太宰府から博多湾に流れる御笠川は都市化の影響で汚れている。「少しでもきれいな、豊かな川に」と市民ボランティアで川掃除を始めて17年になる。子供たちにも声をかけ、自然観察会も始めた。自分たちの環境を自ら知り、守ろうという思いが込められた取組みだ。

◇

沢山の分科会報告のあと、活発な全体討議が交わされ、会場は熱気に包まれた。最後に島谷教授が「地域づくりへの参加は、結局、自分自身が豊かになる。ネットワーク化は目的ではなくその手段です」と締め括った。

分科会報告を受けた後の討議も熱がこもった。この後、交流会も用意された。

テーマ「人が育ち風土が生まれる」

第25回地域づくり団体全国研修交流会

茨城大会

第25回「地域づくり団体全国研修交流会」は2月1日～2日にわたって茨城県内で開かれ、全国から地域づくりに取組む実践家や行政関係者など約４００人が参加。熱心な討議や情報交換が2日間にわたって行われた。全体会は水戸市で、その後、同県内17分科会の会場に分散し、交流の輪を広げた。その模様を報告する。

今大会のテーマは「人が育ち風土が生まれる。いばらきで語ろう。未来につなぐ地域づくり」――と、いささか長い〝語りかけ〟であったが、その熱意と企画は全国からの参加者の共感を呼んだ。主催は地域づくり団体全国協議会を始め、茨城大会実行委員会、地域づくり団体茨城県協議会。

まず、主催者あいさつで地域づくり団体全国協議会の岡崎昌之会長が発言。

「今、地域づくりは大変な状況下にある。私は最近、秋田県の小集落に行った。わずか70戸の限界集落が、あと5年後には50戸と予想されている。地方は冷え込んでいる。何とか、皆さま方、これまでの地域づくりの経験と知識で地域の活性化が図れないものでしょうか」

続いて地元主催を代表して茨城県の橋本昌知事が歓迎のあいさつ。地方をどう守っていくかについて熱心に語った。

そのあと来賓あいさつ。まず総務省自治行政局地域振興課の渡辺秀樹課長。平成6年5月に地球づくり団体全国協議会が設立され今年で14年経った経過を説明し、今回で25回目の全国大会を迎えた意義を強調した。そして「国も力を入れて地域づくりに努めている。昨年、地域づくり総務大臣表彰を全国27団体に贈らせてもらいました」と語った。

続いて財団法人地域活性化センターの石田直裕理事長。同センターとしては地域づくりへの取組みを最重要課題と位置付けていることを指摘。全国の各地で自主的な考えと行動に基き、地域づくりの活発な取組みが行われている事例を報告した。

全体会場での開会式の様子。全国から参加した地域づくりの仲間がテーマ「未来につなぐ地域づくり」を中心に熱く語り合った。

「全国大会開催の第1回、平成6年には全国の参加団体は２０１６団体だったものが今年、第25回を迎え３７３８団体に至った」――と報告。今後とも全国レベルでの交流の大切さを語った。

◇

実は大会開催の前日、1月31日の夜、「キックオフ・レセプション」と名付けた事前セレモニーが用意されていて、そこに参加した人は地元の方のふだんの努力と苦労をさまざまな角度から聞くことが出来、大変良い勉強になった。大会事務局の方々の真摯（しんし）な取組みに拍手！

トークセッション　地域が人をつくる　人が地域をつくる

トークセッションでは「いばらきイメージアップ大賞」を受賞した2団体の代表が、その経験と努力を紹介してくれた。

茨城県には「いばらきイメージアップ大賞」というユニークな制度がある。これは「いばらきのイメージアップ」や「地域の元気」につながる様々な取組みを表彰し、県内外にＰＲすることにより、郷土への誇りと茨城県のイメージアップ、さらには元気な地域づくりを推進しようという意図をこめたものだ。同県主催。

大会では第1回、第2回のイメージアップ大賞を受賞した2団体の代表の方から直接の話を聞く場が用意され、大いに盛り上がった。

まず、「茨城ゴールデンゴールズ」の球団代表、岡本尚博さん。人気タレント、萩本欽一監督のもと、平成16年に結成され、全国から野球が好きな若者を集めた社会人野球クラブチームで、ふだんは稲敷市の近辺に居住し農業などに従事。このチームが昨年、全日本クラブ野球選手権で初優勝を飾り、全国的に知られた。

次に「パンの街つくばプロジェクト推進協議会」の会長、酒井幸宏さんと浅野和男さん。つくば市といえば研究学園都市として全国に知られる。当然、外国人も多い。平成17年、つくばエクスプレスの開業を機に地元の商工会が中心となって「素敵なパン屋がたくさんある街づくり」を始めた。住民、企業、大学、行政の協力のもと、今や新たな〝まちづくり〟のかたちに成った。

◇

このあと参加者は県下17会場の分科会へ向い、討議を深めた。

第2分科会報告

会場・常陸太田市

テーマ「地域資源を活かしたまちづくり」

「ふるさと創生」をきっかけに市民有志によって結成された「まいづる塾」は、平成2年の結成以来、常陸太田市の地域資源の発掘に努め、資料集を作成するなど地域資源のデータベース化を行っている。

市は、これらデータベースを活用してボランティアガイド「まちかど案内人」を養成し、中心市街地「鯨が丘」を中心に市内の名所の同案内人による案内事業を行っている。分科会当日は、「まちかど案内人」から中心市街地「鯨が丘」の案内を受けた。

中心市街地「鯨が丘」は、江戸時代から戦後まで地域の物産の集積地として栄え、問屋街が成立した。現在はいわゆる「シャッター通り」となっているが、往時をしのぶ古い土蔵・町家等が残り、これらを活用したまちづくりが模索されている。

レストランに改修された土蔵

〔活用例〕

・空き店舗（衣料デパート）をダンスの練習所に改修。使い手良さと低料金から車で30分以上かかる水戸市内からも申し込みあり。

・古い土蔵をレストランやコンサートホールなどに改修。新たな地域の賑わいを創出している。

第13分科会報告

会場・つくば市

テーマ「万葉の里からの未来づくり」

つくば市といえば研究学園都市として知られるが、実は万葉集にも登場する歴史と自然が生きずく街。平成17年、つくばエクスプレスが開通し、東京との距離が一層近くなったが（電車で45分間）、地元では分科会テーマのように常陸の国の歴史を中心としての地域づくりに熱心に取組んでいた。

確かに市の中心街は未来都市の装いで産・官・学・民による都市づくりの活発な様子がうかがえたが、私たちを案内してくれた主管団体「筑波山麓地域づくり団体連絡協議会」の皆さんはむしろ、つくば市の歴史と自然の豊かさを「見て、感じてほしい」との趣向であった。その郷土愛の熱さが充分に伝わって来た。

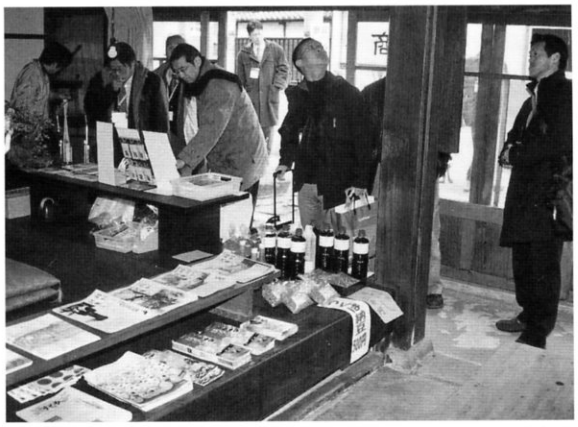
(1)全体会会場から、つくば市の宝篋山の山頂へ登る。ここからは筑波山を始め、富士山、さらに東京の夜景を含め関東平野の全景がのぞめる。まさに絶景だ。中世・常陸の国の中心地、小田城跡の説明を郷土史家、井坂敦實さんから聞いた。

(2)日が落ち、宿泊地のホテルで交流会～夜なべ談義。地元の地域づくりの情報をたくさん頂いた。

古い街並みをどう守り、地域の活性化にどう活かしていくか。
江戸時代からの商店街、北条地区を視察する参加者の皆さん。

(3)翌日（2日）は朝から筑波山神社の拝殿参拝。雅楽の舞いと万葉集や同神社の古い歴史や宝物の説明をうけた（筑波山は日本百名山のひとつ）。

(4)北条地区へ向う。ここは江戸時代から続く商店街で、最近、人足が市の中心部に動き、人影が薄らいだが、魅力は充分。それをどのように活用するのか。実はそれに敏感に感応したのが茨城大学を始めとする学生さん達だった。コーヒー店を始め新しいアイデアで取組む。NPO法人「小田地域振興協議会」の東郷重夫さんは「つくば市は研究学園都市ではなく美しい豊かな自然と歴史に育まれた人に優しい未来都市にしたい」と熱く語った。


築150年にもなる商店の中に入ると風格があって皆は感心。手前は情報誌（無料提供）。向うは地元特産のしょう油や納豆など。魅力的な空間だった。

次回大会は 今年11月 愛媛県

京築　文化と食の祭典を開催

～神楽が舞い、ごっそうも舞った～

主催 福岡県と京築7市町「京築連帯アメニティ都市圏推進会議」

福岡県は昨年2月に京築地域の7市町（行橋市、豊前市、苅田町、みやこ町、吉富町、上毛町、築上町）と協働で「京築連帯アメニティ都市圏構想」を策定した。京築地域は長い歴史と文化、豊かな自然に恵まれる一方、北部九州における自動車関連産業の集積が進み、未来へ向け力強く歩んでいる。

昨年11月10日～11日に開催された「京築　文化と食の祭典」～神楽が舞い、ごっそうも舞う京築の秋～は豊前市民体育館で開かれ、大盛況であった。京築地域で伝承されてきた伝統ある神楽と、創作された新しい神楽の舞いが披露され、京築のもつ〝地力〟が改めて確認された。その魅力のひとつが「京築祭りごっそう」であった。同市民体育館の屋外特設テントでは京築自慢の「ごっそう」が販売され、豊前海でとれたワタリガニの海鮮汁が無料提供されるなど、多くの人が楽しんだ。

この企画は福岡県と地元7市町の「京築連帯アメニティ都市圏構想」をもとに実施されたもの。京築地域が持つ「産業の力」▽「文化の力」▽「教育の力」を活かし、地域の総合力や魅力を高め、大都市にはないゆとりある居住性やレクリエーション環境など多様なアメニティと都市機能を兼備させようという構想である。

昨年6月、構想実現のため「京築連帯アメニティ都市圏推進会議」（会長・麻生渡福岡県知事）が発足し、5つの戦略的プロジェクトが立上げられた。

(1)「産業の力」向上プロジェクト

経済発展と豊かな自然環境が両立している地域特性を維持・発展させる。具体的には一次産品のブランド化、北九州空港の活用、自動車関連企業の集積拡大など。

(2)「教育の力」育成プロジェクト

地域特性・資源を活かした人材育成など。

(3)「文化の力」蓄積プロジェクト

神楽など伝統的な祭りを中心とした文化交流拠点の形成。

(4)景観活用プロジェクト

まちなか、山間地などの景観保全のための広域的な風致景観ルールづくり。

(5)情報発信プロジェクト

インターネットを活用した地域情報発信のための仕組みづくり。

◇

京築地域は歴史と文化を始め、豊かな自然のもとの特産品（「豊前海一粒かき」やイチゴなど）に恵まれているほか、北部九州における日産、トヨタ、ダイハツなどの立地に伴い、今まさに「京築産業力新時代」を迎えている。

多くの人でにぎわった祭典の様子

京築地域は神楽が盛ん。祭典では新旧あわせ実に15の神楽が披露された

京築は海産物が豊か。当日は豊前海でとれたワタリガニの海鮮汁が無料で提供され、大人気だった。

こんにちは

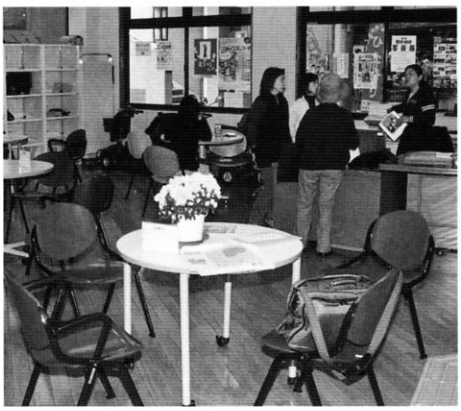
地域づくり団体訪問 シリーズ㉑

秋に全国版の企画を共催

NPO法人 シニア情報プラザ久留米

この団体の活動は多彩で多様だ。久留米市の六ツ門商店街。老舗が並び、デパートの井筒屋もあるが、西鉄久留米駅から離れていることもあって近年、客足が遠退き気味。そこで地元はがんばった。

平成15年6月に商店街の一角に市が六角堂広場を建設した。シニア情報センター久留米では、そこの建物の一部を利用して**タウンモビリティ**の活動を展開する。もちろん、市の業務委託を受けてのスタートである。このタウンモビリティとは聞きなれない言葉だが、要するに高齢者や障害者の人々に市の繁華街に来てもらい、ショッピングや食事など楽しいひとときを過ごしていただこうという、福祉の心からの外出支援の活動だ。毎週、木・土・日の3回実施する。利用料金500円。さて、その送迎の手段は?心強い応援があった。久留米大学など地元の学生さん約100人のボランティア協力である。登録しているお年寄りや障害者は約150人。リフトカーでの送迎、車イス、電動スクーターを始め、若い人向けのベビーカーまで用意。もちろん介護には学生が付き添って安全を図る。



シニア情報プラザの内部の様子。
若い人もお年寄りもフラリと寄ってひと休みができる。

このような「やさしい街づくり」活動は全国でも珍しい。お年寄りの間からは「楽しかった。何年ぶりにショッピングをしたかな?家族と違って若い人の声を聞いて元気が出た」—といった感謝の声が寄せられている。

実はこの仕掛けと取組みには1人のキーマンがいた。ケアマネージャーの吉永美佐子専務理事。英国生まれのタウンモビリティ運動を知り、久留米市での活動につなげた。この取組みは平成18年、毎日新聞社主催の毎日介護賞の奨励賞に輝き、全国的に知られることとなった。

同団体の取組みは、この他にもいろいろある。年輩者向けのパソコン教室は以前から。春の花見、秋のクリスマス会、陶芸教室…など。

今、同団体はもちろん久留米市、商工会議所、有志など市をあげて取組んでいるのが、この11月予定の「**B—1グランプリin久留米**」の開催。全国版の企画だ。第1回が八戸市、第2回が富士宮市と人気を呼び、今秋の久留米市が第3回目。「やりますよ」と自信をみせる地元の企画情報誌「くるめすたいる」発行の筒井博文さん。この催しは、まだ全国に知られていない郷土の"うまいもの料理"の全国コンテストだ。久留米では、これまで「とんこつラーメン」の発祥の地▽「焼き鳥店」日本一—など、多いにマスコミで報じられた。「味と人情で、もっと久留米を知ってもらえれば久留米は元気になると思います」と同団体をまとめる黒川理事長は語った。

団体概要

- ●代　表　黒川幸治
- ●事務局
  久留米市六ツ門町9の1
  六角堂プラザ1階
  ☎0942(36)0006
- ●設　立　平成12年4月

地域づくり団体にも成長期と「病気」がある

報告 全国・地域づくりコーディネーター研修会

全国の地域づくりコーディネーターが一同に集まる地域づくりコーディネーター研修会が昨年8月30～31日、東京で開かれた。参加者は約50名。テーマは「地域経営と組織マネジメント」。まずは京都橘大学織田直文教授が「地域づくりコーディネーター論」を披露。続いて「人材発掘と人材育成」「組織の持続的な展開」をテーマに2分科会で事例報告とパネルディスカッション。中でもとても印象に残ったのが、能登乃國ゆするぎ塾長の大湯章吉氏の発表。地域づくり団体の成長を幼年期、思春期、青年期、壮年期、老年期に分類し、起こりやすい"課題"と"対策"を「病気」と「治療」という言葉で面白く紹介。最後の締めはワークショップの達人、延藤安弘愛知産業大学教授。コーディネーターは「大らかにコトをすすめ一人も排除しない」「楽々とめんどうくさいことをやる」「岩盤は行政、表土は地域、花を咲かせる住民」など名言を披露。永年まちづくりをやってきたこの私にとっても、たいへん勉強になった2日間であった。感謝!

(報告)福岡県地域づくりコーディネーター　今泉重敏

ひと模様

福島　マリエさん（24）

九州産業大学に留学して春に帰国する

今年は日本人のブラジル移民100周年にあたり、ブラジルでは日系人によるさまざまなイベントが計画されている、という。福島マリエさんは1年間の日本留学を終えて4月にブラジルに帰国する。

福島さんが福岡に来たのは特別の思い入れがあったからだ。祖父、福島正登氏は3年前、81才で亡くなったが、氏はブラジル南部のパラナ州（サンパウロの近く）では知らない人がいないくらい著名な人物だった。日系人社会の地位向上にも多大な功績を残した。その祖父の出身地が福岡県の田主丸だった。

福島さんは日本の社会をもっと深く勉強してみようと思った。

ここで簡単に福島正登氏の事績を紹介しておこう。1924年の生まれ。11歳のとき父母とブラジルに渡り農業に従事。次に雑貨商を営み、精米業へと発展。穀物商としても成功する。1995年、日本の外務大臣から日本移民発展に尽くした、として表彰される。文化活動や体育振興にも寄与した。2001年には福岡県知事からの招待で、民間大使として夫人同伴で来福。

福島さんはブラジルの福岡県人会の世話で日本に来た。九州産業大学（福岡市）で、関心のある観光業の勉強を続け、大いに得るものがあった、という。

「将来は観光業の会社をおこし、日本とブラジルの懸け橋になりたい」と目を輝かした。その福島さんに映った日本社会とは―。

「食べ物はおいしいし、街は清潔だし、人は親切。日本に住んでも良いなあ」

そうは言いつつ、次のような観察も。

「でもね、確かに日本人は親切なのですが、どこか壁があって、フランクに心の中を見せてくれない。外国人を避けているみたい」―と。福島さん、また来日して心の懸け橋になって下さい。

今年はブラジル移民100周年

祖父は田主丸出身の日系3世

お知らせ

地域づくりネットワーク福岡県協議会から

第6回福岡県地域おこし研修・交流会は、島谷先生をはじめとする九州大学の方々、事例発表をこころよく引き受けていただいた地域づくり団体の方々、また福岡ブロックの幹事である、はかた夢松原の会や地元の皆様のご協力のもと、多数の方々にご参加いただき、盛会に開催することができました。厚く御礼申し上げます。

次回は北九州地域での開催を予定しています。会員の皆様のご協力とご参加をお願いいたします。

当協議会は会員の皆様への情報提供と、会員同士のネットワークづくりを目的に、様々な事業をおこなっております。

一例を申しますと、会員の皆様の活動を支援するために講師や助言者を派遣する地域づくりコーディネーター派遣事業があります。事業の申し込みや協議会へのご要望がございましたら事務局までご連絡ください。

協議会事務局担当　米岡

地域づくりコーディネーターの目

その㉓

岡本顕實

今年度の第25回地域づくり団体全国研修交流会・茨城大会に参加した「特別の感想」を述べたい、と思う。私は第13分科会のつくば市の会場に出席させて頂いたのだが、この分科会のテーマが「万葉の里からの未来づくり」だったからだ。

私は当初、疑問を持った。つくば市といえば国が力を入れている最先端の研究学園都市である。そこへ「万葉の里」を謳い文句にどのような地域づくりが展開されているのか？

私の大会・分科会報告の内容は本誌の3～4頁にまとめましたので、そちらをご覧頂きたいのですが、つくば市での特別の印象とは次のようなことでした。

確かに、つくば市の中心市街地は街並みも整備され堂々と発展しており、東京と電車でわずか45分間で結ぶ「つくばエクスプレス」も開通したが、実は地元の人が最も心掛けているのは歴史と伝統の街づくりだった。

「では、水と油の関係ですか？」と分科会の世話人の方に秘かに聞くと……。

「いえいえ、これからだと思います」とニッコリ。こういうことだった。研究学園都市だから全国から大学教授を始め多数の知識人が集まり、博士号を持つ人だけでも実に1万人に及ぶという。「団塊の世代の方が多く、これから毎年、300人以上が退職されます。そのうち、かなりの人が地元に住み、地域づくりに関心を寄せられています」。今後、新しい動きが始まりそうだ。